

第7回

楽譜と演奏の複雑な関係 ～西洋音楽の歴史と鑑賞（1）～

学習のねらい

西洋音楽の歴史と鑑賞のシリーズでは、「クラシック音楽」と呼ばれている音楽の流れを、バロック音楽から古典派そしてロマン派、さらに近現代の音楽へとその特徴をたどっていきます。今回は、西洋音楽の特徴の1つ「楽譜」に焦点をあてて、同じ作品でも指揮者によって異なる演奏結果が生じるのはなぜかを考えていきます。ベートーヴェンの有名な交響曲第5番「運命」を聴き比べなら、西洋音楽について理解を深めていきましょう。



講師
沼野 雄司

作曲家と楽譜の関係について考える

一般に「クラシック音楽」という呼び名で知られる西洋芸術音楽は、まず、(1) 作曲者が頭の中で音楽を発想して、それを楽譜に書きあらわす、(2) その楽譜を演奏者が読み解き、解釈して音を出す、(3) その音を聴き手が耳にする、という3つの段階からなりたっています。

同じ音楽であっても、たとえば民謡の多くは作曲者が不明ですし、もとの楽譜というものも存在しません。また、ロックバンドの場合は自作自演がほとんどですから、その曲をカバーしたりする場合は別として、楽譜を他人が解釈するという事態は通常は起こりません。こうした音楽に比べると、クラシック音楽の場合には、「楽譜」というものの占める役割がとても大きいのが特徴です。あえて強引な言い方をしてしまうと、クラシック音楽とは「楽譜の音楽」とさえ定義できるかもしれません。

指揮者によって、なぜ異なった演奏が生じるのだろうか？

ベートーヴェンやチャイコフスキーの曲をどこかで知って気に入り、CD ショップに出かけてみたら、同じ曲でも複数の種類、場合によっては何十種類もの演奏が並んでいて、どれを選んだらよいか迷ってしまったという経験はありませんか？ ふつう、ポップスの場合には、ひとつの歌は特定のアーティストと強く結びついていますが、たとえばベートーヴェンの「運命」ともなると、100種類を超えるいろいろなバージョンが存在します。どうしてこんなことが起こるのでしょうか？

これはひと言でいえば、西洋音楽で用いられる楽譜（＝五線譜）が「不完全」だからです。五線譜は音の高さや相対的な長さについては、かなり厳密に記すことができるのですが、音の

強弱やさまざまな細かいニュアンスを紙の上に正確に示すことはできません。また、弦楽器のヴィヴァルト（弦を細かくふるわせて、音にうるおいを与える技術）などについても、指定はなされていないのが普通です。

では、いったいどのくらい解釈の幅があるのか、番組でベートーヴェンの「運命」を、ブロムシュテット、ブーレーズ、ノリントンという3人の指揮者の演奏で聴き比べてみましょう。

楽譜の役割と限界について考える

楽譜というのは、いわば、あいまいなグラフのようなものといえるでしょう。おおまかに音楽の姿を示すことはできるものの、音楽の要素のすべてを記すことはできないのです。

その意味では楽譜には限界があるのですが、しかしこの場合の「限界」は決して、マイナスの要素ということではありません。むしろこのあいまいさゆえに、1つの楽譜に対してさまざまな解釈、言い換えれば、さまざまなスタイルの演奏が可能になるのです。多種多様な演奏の可能性がひらかれているおもしろさ、これはクラシック音楽の大きな魅力といえるでしょう。

♪ 今回取り上げる曲 ♪♪

■ベートーヴェン作曲 交響曲第5番ハ短調作品67 第1楽章

- グスターヴォ・ドゥダメル指揮 シモン・ポリバル・ユース・オーケストラ・オブ・ベネズエラ
- ヘルベルト・ブロムシュテット指揮 ドレスデン国立歌劇場管弦楽団
- ピエール・ブーレーズ指揮 フィルハーモニア管弦楽団
- ロジャー・ノリントン指揮 ロンドン・クラシカル・プレイヤーズ

■ベートーヴェン作曲 交響曲第5番ハ短調作品67 第2楽章

- ヘルベルト・ブロムシュテット指揮 ドレスデン国立歌劇場管弦楽団
- ロジャー・ノリントン指揮 ロンドン・クラシカル・プレイヤーズ